

いわかづみ

令和五年十二月 第九五号

- ◇ 村の景観と歴史・人物(14)
- ◇ 民具が語る生活史(民具④続き)
- ◇ 方言一考(とろっぺつ)
- ◇ モノ言うもの(米坂線開通の新聞記事)
- ◇ 歴史館行事の報告・お知らせ

村の景観と歴史・人物(14)

峠を越えた人たち⑤

雪の峠越え・悲話

渡辺 伸 栄

ラッセルとかんじき

雪山の登山で、積もった雪をかき分けて進むことをラッセルと言います。やわらかい雪に足が沈むを防ぐため、たいていは、かんじきを履きます。

無垢の雪原を進むのは、じつに気持ちのよいものですが、何せ、かなりの体力を消耗します。それで、数人で縦一列になり、先頭を適時交代しながら進むことになります。

先頭を交代した人は、隊列の最後尾に回ります。四番手くらいになれば、前の三人が踏みつけてくれた道が出来、楽々歩行です。先頭で消耗した分を回復させながら、次の先頭番に備えます。

これを順繰り順繰りに繰り返して消耗を最小限に抑えるのが、効率のよい雪中歩行というわけです。

私たち阿賀北山岳会の登山では、いつも安久さんが均等にタイムを計って先頭交代の合図を出してくれます。それなのに、自分のときは、なぜか交代時間が長いような気がするから不思議です。

大勢人数がいて、横隊を組んで交代ラッセルをすれば、その後ろには立派な雪の舗装道路が出来上がり、そりを引くことも可能になります。八甲田で遭難した旧陸軍の青森連隊も、そのようにして雪原を行軍していたといえます。



1月の高坪山ラッセル登山

雪中の峠越え

十三峠時代の積雪期通行も、同じように雪踏みの方式で行っていたようです。

物流の主役だった牛馬は雪中歩行ができず、もっぱら人力頼み。荷物は背に負って運ぶとして、道付けの雪踏み人夫が必要です。

隣の小国町には、江戸時代、米沢藩の出張所が置かれていました。本来は小国城なのですが、幕府の一國一城令で城とは呼べず、御役屋と呼ばれていたそうです。そのトップは御役屋将です。実質は小国城代で、江戸時代の早い頃には上関城主の末裔・三瀧左近助も小国城代でした。御役屋将は、毎年初、本社である米沢城へ年賀の挨拶に伺うのですが、真冬の峠越え、とりわけ標高の高い宇津峠越えは大変です。

荷物の運搬と雪踏み道付けのため、人夫が毎回八百人必要だったと記録されているそうです。それは全て街道沿線村々からの徴発です。あまりに大変で、安永七年(一七七八年)から、御役屋将の年賀挨拶は廃止になったといえます。(出典は小国町発行「小国の交通」、以下同じ)

とはいえ、冬季の物流を止めることはできず、荷物の運搬と雪踏み道付けの人夫は欠かせません。小さな宿場で三十人、小国町で百人、宇津峠をかかえた手ノ子の宿場では百五十人の人夫を出したという記録もあるそうです。

明治になって、宇津峠越えの新道が作られた後も、雪踏み作業のために、峠の麓に刑務所の出張所を置き、そのこの四人を使役したということでした。

雪の大里峠越え悲話

雪山の通行で最も怖いのは雪崩です。

私たちも、表層雪崩の跡を通ったこともあり、全層雪崩のすさまじい音も何度か聞いています。もちろん、君子危うきに近寄らずで、地形と積雪状況には十分すぎるほど注意してきました。

峠越えの人たちも、十分注意していたので、悲しい記録も残っています。

大里峠を越えて玉川の集落に近づいた辺りの道の端に、凶霊供養塔と刻まれた小さな石碑が立っています。

天明元年(一七八一年)十二月二十二日、大里峠を越えて玉川に向かう雪中歩行の二十六名を表層雪崩が襲撃。十六名が直撃されて九名死亡、七名救助蘇生という大事故が発生しています。

一行の中に「六部」という諸国巡礼の旅人がいました。この人物が病気になる、何としても



小国城址探訪(古道探索会)

米沢まで行きたいというので、沼村で人足を二十一人出してもらい、六部はそりに乗せてもらって峠越えをしたのだそうです。あとの四人はたまたまの同行者だったようで、その中には、上関村の助次郎という人もいて、この人は救助され蘇生したそうです。

死亡者は、当の六部と沼からの人夫七名、同行の商人一名と記録されています。

それから七十三年後の嘉永七年(一八五四年)十二月十七日に、同じ場所で雪崩事故が発生。地元の家には悲しい言い伝えがあるといえます。

その家の嫁が、秋の休みになって実家のある荒島(旧荒川町)にいたのですが、正月も近いというので夫が迎えに行った、その帰り道のこと。夫はラッセルで道付け、後ろをやや遅れて歩いてた嫁と七歳の子どもが雪崩に巻き込まれて落命。何とも悲惨な話です。

あの凶霊供養塔は、この二つの事故の犠牲者を慰霊したものとのこと。雪山の雪崩ほど怖いものはありません。

(嘉永七年は、十一月二十七日に改元して安政元年ですが、原典のまま表記してあります。)



大里峠の「凶霊供養塔」

米坂線の雪崩大事故

鉄道でも大事故が発生しています。

昭和十五年(一九四〇年)三月五日、小国駅を出て坂町駅に向かっていた鉄道列車が、旧玉川駅の手前で雪崩のため鉄橋から転落、十六名死亡三十名負傷の大事故。現場近くには、殉難碑と書かれた大きな慰霊塔が立っています。

この事故の時、「各家にある味噌を供出しろ」という指示が来て、担げるだけ担いで駅まで運んだという話を母から聞いた記憶があります。やけどの負傷者が多く出て、その治療に大量の味噌が必要だったそうです。今調べてみると、ストーブの火の延焼説や積荷の硫黄合剤の爆発説などが言われているようです。

幼児の私が湯たんぽで足を低温やけどしたとき、母が味噌を塗ってくれて、こんな話をしてくれたのだと思います。

名のある人もない人も、歴史に登場する人々はすべて霞の彼方。現世に居る者は、せめて、仏壇の前で手を合わせ、般若心経を唱えることしかできません。五蘊は皆、空です。



米坂線雪崩事故「殉難碑」

民具が語る生活史 民具⑦庚申講の掛け軸②

先回に引き続き庚申講の掛け軸についてです。有磯周斎(ありいそしゅうさい)の掛け軸には、青面金剛(しやうめんこんごう)の他にもさまざまな物が描かれています。

正面右上には日、左上には月。青面金剛は足元に邪鬼(じやくき)を踏みつけ、その六臂(六本の腕)で法輪・弓・矢・劍・錫杖・シヨケラ(半裸の女性、悪さをしないように髪を捕まれている)を持つています。両側には童子。邪鬼の下方には雌雄の鶏が描かれます。こちらは徹夜する庚申講と夜明けを告げる鳥の関係からです。鶏の下には「見ざる言わざる聞かざる」の三猿。こちらは先回触れたように、申(さる)との関わりです。その両脇には鬼がいます。



以上、掛け軸を詳しく見てきました。それでは、各地に見られる庚申塔(こうしんとう)とはどういうものでしょうか。

庚申信仰は江戸時代に盛んになり、長寿から商売繁盛、豊作、大漁など、ご利益は拡大解釈されていきます。そして、各地の村に「庚申待(こうしんまち)」をするグループ、「庚申講」ができました。講の成員は、庚申講の晩に農作業や日々の様々なことを話し合うのが楽しみのひとつだったようです。

庚申信仰による功德を願うために建てられたのが「庚申塔」です。庚申待を3年間連続して行ったとき、また庚申の年に造立されました。多くが石塔で、「庚申」「庚申塔」という文字や青面金剛などが彫られています。

庚申塔はその多くが集落の入口やはずれにあります。中には、街道沿いに道標を兼ねて建つものもあります。疫病(えきびょう)を防ぐ道祖神と同一視され、塞神(さいのかみ)として村境に築かれることも多く、こちらは猿田彦命(道案内の神)との関係かもしれません。

庚申信仰は、夜寝てはいけな、精進潔斎に勤めよ等の制約にも関わらず、全国的に広まりました。それだけ夜にみんなが集まり、語り合うことの楽しさに価値を見出していたのではな

いか、との分析もあります。

様々な願いを叶えてくれる庚申様。祖母はお寺の入口にある集落の庚申塔を「おこしりさま」と呼んでいました。いずれのときか、霧出川の渡渉地から移したものです。いまでもお賽銭があまり、祈る人の姿が見られます。(田村舞子)

☆先日、秋の美術館巡りで鶴岡市の風間家住宅を見学しました。こちらは村上市の宮川屋(風間家)係累の方の住宅です。床の間の狛潜り(ちんくぐり)は、上座敷を有磯周亭(しゅうてい)が、釈迦堂を稲垣八良が手掛けたそうです。周亭は周斎の孫にあたり、稲垣八郎は八郎兵衛家の方です。有磯周斎はもとは稲垣家の一員で、藩主から有磯の名字を拝命しました。鶴岡市での思わぬ出会いに驚きました。

参考文献 福田アジオ他編 1999 『日本民俗大辞典・上』 吉川弘文館

方言一考・とろっぺつ

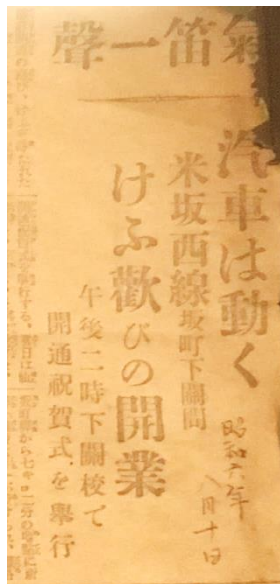
これも独特な言葉で、知らない人には推測できそうもない意味を持つ方言である。「いつも・始終・ずっと」を強めた「のべつ幕無しに」という意味で、これを日常的に使うとすれば、村民としてはかなりのベテラン、年長の域にある。宮城でも似た言葉があるそうだし、関東では「とろっぺ」とか「とろび」という言葉が残っていて意味は同じだ。古語では「とろっびよう」という言葉があつて、やはり「いつも・始終」という意味で使われていた。「とろ」が「頻度が高い」という意味を表すのかもしれない。

夫人から解放される間が唯一ストレスの無い時間であるのか、冬になつても様々な仕事を作つてお野立公園に通うK氏に当てはめれば「とろっぺつ公園でなんかしてる」となる。庭木の移植、剪定、雪囲いと余念ないのである。「これぐらいの木であれば世話のし甲斐もあるが・・・」と、主夫兼運転手は時々思う。今や巨木となり、伸び放題の枝葉に成す術も無く、ただその樹下を右往左往する自分を顧みるようだ。

今夏小生は二つのキレットを越えて白馬から鹿島槍までひとり縦走したが、彼も若い頃にそこを歩いたと言う。とろっぺつ山ばかり行っていた時期があつたらしい。彼にも私にも人生のキレット越えは尽きないが、その愚直さで歩くしかない。

モノ言つもの・米坂線開通の新聞記事

米沢から坂町に至る鉄道の構想は明治の頃からあつたが、山間僻地で取り残され、大正年間になつてから関谷村長渡辺三左衛門が中心となり運動を展開した。しかし関東大震災や世界的恐慌もあつて計画は進まず、ようやく坂町と越後下関が開通したのは昭和六年の八月であつた。当時の新聞は「汽笛一声」「汽車は動く」「米坂西線 坂町下関間 きょう歓びの開業」と見出しをうって大きく伝えている。



(字が小さいので見出しの部分のみの写真)

この当時の女川、関谷村の交通、運送手段は主に自転車、牛馬車、リヤカー等で、自動車は数えるほどしかなかったから、鉄道は画期的な変化を齎した。また、農村は米価と繭価の下落で困窮し、国際的には満州事変により国際連盟からの脱退、不況を背景に軍部が台頭するという暗い時代でもあつた。そして二・二六事件が起こった同年の昭和十一年の八月に米坂線が全通したのである。この鉄道がその後どれだけの希望を運んだかは今の時代には想像できない。(上記とも安久)

歴史館行事の報告 ○出土品解説会 10月

14日(土)、調査員の齊藤準さん(教育課)による関川村で出土した遺物の解説会。参加者のみなさんには間近で出土品をご覧いただきました！ ○

歴史講座 佐藤忠良さんを講師にお迎えし9月・10月・11月の計3回開講しました。関川村の歴史を学びました。 ○秋の美術館巡り 10月21日

(土)致道博物館と風間家住宅、参加者19名・11月11日(土)山寺と慈恩寺、参加者20名。錦秋の出羽路を楽しんできました。 ○秋の古道歩き「出羽街道・大沢峠」11月5日(日)、参加者16名で、大沢・大毎・北中を歩きました。ガイドさんの案内で、芭蕉に思いを馳せる秋の日を過ごしました。

○古文書解読講座(10月・12月) 江戸時代の村の暮らしを古文書から学んでいます！ ○歴史講演会 10月26日(木)、講師田村舞子、「渡邊家と米沢藩」。

ご参加ありがとうございました！

お知らせ

○村民ギャラリー「新春書き初め作品展」会期：1月4日(木)～1月28日(日)、月曜休館・月曜祝日の場合は翌火曜休館、観覧無料。 ○山と花のストライド解説会 1月21日(日)、13時半から当館映像ホールにて、参加無料、要申込。 **よいお年を☆**

いわかがみ 第九五号

発行日 令和五年十二月

編集発行 せきかわ歴史とみちの館

tel10254-64-1288 Fax0254-64-0300